

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月27日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2008～2011

課題番号：20243015

 研究課題名（和文） 有機的ヴィジョンの構想力と経済統治のデザイン：
世紀末～戦間期経済思想の国際比較

 研究課題名（英文） The Organic View of the Society and Designing of Economic Governance:
comparative research of the economic thought from the fin-de-siècle to the inter-war
period

研究代表者 深貝 保則 (Fukagai Yasunori)

横浜国立大学・経済学部・教授

研究者番号：00165242

研究成果の概要（和文）：

世紀転換期以降の社会のあり方を構想するうえで、有機体説的な社会観と進化論的なヴィジョンは相互に浸透しながら重要な役割を果たした。経済統治の現われにおいては、制度、組織、生活習慣などが自ずと育つことに委ねる「ソフトな統治」と、一元的な基準のもとで整える「ハードな統治」との2傾向が見られた。同時期における「ウェルフェア」、「ウェルビーイング」用語の変容に注意を払って、戦間期にかけての有機的ヴィジョンの意義を解明した。

研究成果の概要（英文）：

On the turn of the centuries from nineteenth to twentieth, the organic view of the society and the evolutionary view had mutually affected, and took the important role for the reformation of the image and style of the society. On the sphere of the economic governance, there appeared two striking types: the 'soft' version which basically relied upon the spontaneous formation of the institution, organization and custom or the way of life, and the 'hard' one which provided the guidelines under the uniform orientation. In accounting the radical transit of the meaning of those words of 'welfare' and 'well-being' on that era, this research project examined the connotation of the organic view until the inter-war period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	5,200,000	1,560,000	6,760,000
2009年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2010年度	5,200,000	1,560,000	6,760,000
2011年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
年度			
総計	18,100,000	5,430,000	23,530,000

研究分野：経済思想史

科研費の分科・細目：経済学 経済学説・経済思想

キーワード：有機的ヴィジョン、経済統治、世紀末、戦間期、社会進化論、国際比較

1. 研究開始当初の背景

19世紀の先進国のあいだでは「進歩」と「自由」を軸にした経済統治（経済についてのガヴァナンス）が比較的順調に進んだ。しかし19世紀終盤になると、この枠組は大幅に修正

を迫られる。外交および経済を外延的に拡張させる戦略が相互に衝突を起こす緊張に直面しつつ、各国の内包的な利害の面でも社会階層間、および産業と金融をめぐる利害間で新たな調整を必要とする局面に差

し掛かったからである。このような世紀転換期の状況をめぐって、歴史研究の面ではかつての帝国主義史論に替わる帝国史研究および政策思想史研究が展開し、また固有の思想史研究の面では歴史的にユニークな「新自由主義」の意義に着目するスタイルが欧米で積み重ねられてきた。このうちの後者については従来の日本の学界は十分に取り入れることができず、本研究課題の目的の一つはこのギャップを埋めることに置かれた。

本研究課題は、当該領域に関わる経済思想史、経済政策思想史および政策史研究に関わるメンバーを横断的に研究組織メンバーとして配置するとともに、政治哲学・政治思想史を含む欧米の研究者と共同研究を展開するものとして組まれた。これは、政策思想史、思想史それぞれの領域において進められている新たな研究動向を、「有機的社会ヴィジョン」を切り口に据えて横断的に統合して掘り下げることを目指したものである。

2. 研究の目的

19世紀末からの局面転換を思想的に分析するに当たって、本研究課題は有機的なヴィジョンが持った構想力の意義に着目した。イギリスの T.H.グリーンやフランスのデュルケムによって担われた有機体説的な社会観と、ダーウィンやスペンサーによって展開された進化論とともに、世紀転換期以降の社会のあり方や経済的な統治を構想するうえで重要な役割を果たした。この展開ののち、とくに第一次大戦を経た後に各国の経済再建のプランが試みられ、国際的な緊張回避のための財政運営や金融秩序の構築が模索されることになる。これらを中心的な検討点に据えて、年度ごとに重点を移しながら海外の研究者とともに研究集会を開催し、論文集を構想・編纂することを目的とした。

3. 研究の方法

年度ごとに力点を移しながら、海外の研究者とともに研究集会を開催し、検討を進めた。(なお、以下の年度ごとの記載のうち一部分は、海外から招くべき研究者の都合によって次の年度に繰り越しての招聘となったケースがある。)

まず第1年目の2008年度には概念的な変化の多様性と、各国におけるスキームの国民的・政治的特質を照らし出すことに重点を置いた。(1) J.S.ミルに代表される19世紀の古典的自由主義からホブハウスら世紀転換期の新自由主義への進展は、有機的ヴィジョンやいわゆるイギリス理想主義との交錯という側面と並んで、ブリテン帝国の国際的スキームの変容という観点を盛り込んで意味づけることができる。これらについてそれぞれ、D.ワインシュタイン、P.ケインとのセミ

ナーを設け、検討した。(2) 産業技術の急速な変化を伴う当該の時期においては、各国における社会統合の道筋は文化的で国民的なアイデンティティを確かめ直す作業でもあった。これは、たとえばアメリカにおける金ピカ趣味から禁酒法への揺らぎのなかに窺えるとともに、国家統一から間もないイタリア諸都市の文化的意識統合においてオペラが果たした機能にも典型的に見ることができる。この点をめぐって、D.シープレイ、A.ケルナーらとのワークショップにおいて検討した。

第2年目の2009年度には、まず(1)前年に続いて、19世紀後半ブリテンで展開した理想主義の思想傾向を政治哲学の観点から検討するとともに、日本、韓国など極東諸国におけるその摂取・変容(換骨奪胎)との関連を対比的に検討すべく、A.シモニーらとセミナーを行なった。(2) 現実の政策展開との関わりでは、第1次大戦などによって大きく揺らいだ各国の財政や金融をいかに立て直すのかが重要な意味を持つ。横浜国立大学図書館が所蔵するカール・S.シャウプ・コレクションを活用して、セリグマン以降カール・S.シャウプに至るコロンビア大学の財政思想の系譜を中心的な主題とするシンポジウムを、2009年12月にE.ブラウンリーをはじめ外国人研究者7名とともに開催した。そこでは統治と財政とりわけ租税制度の関わりをめぐり構想について、ドイツ、アメリカ、日本のあいだでの比較検討が行なわれた。

第3年目の2010年度には、20世紀中盤以降には主導的な地位を担うことになるアメリカが、それに先立つ20世紀初頭以降戦間期にかけていかなる統治構想を組み立てていたのかを中心に検討することとした。このワークショップには、自由と人間の認識能力との関わりをめぐり市場的秩序の根拠を掘り下げた思想家フランク・ナイトに関してR.エメットの、また1930年代から戦後にかけての全体主義的傾向と自由との緊張を検討するためにD.シープレイの参加・報告を得た。

第4年度の2011年度には、上記の検討を踏まえて欧米および日本の議論を横断的に俯瞰しつつ、政治哲学的な概念の多層性を掘り下げることが目的とした。有機的ヴィジョンが統治とりわけ福祉国家の思想的基礎づけにとって占めた意義に関してM.フリーデン、優生学が経済思想に及ぼした影響についてA.コット、いわゆるイギリス理想主義の社会理論についてC.タイラー、芸術を介した社会の文化的統合とイタリア自由主義に関してA.ケルナー、コーポラティズム(集産主義)の戦間期南欧における展開に関わって主にイタリアについてはM.グウィディ、ポルトガルおよびスペインについてはJ.カル

ドソ。これらのメンバーの参加を得て、ワークショップを開催した。

これら複数年の研究期間を通じて、それぞれのワークショップごとに研究組織メンバーを含む日本人研究者の複数名も英文で報告を行なった。19世紀後半以降の進化論の影響下において都市における居住とコミュニケーションを軸とする設計思想の展開が顕著に見られたこと、また、第1次大戦において典型的に爆発した国際緊張の裏返しとして国際機構の重要性が理解され始めたことなどに焦点を当てて考察した。このうちの後者については、いわゆる管理通貨制成立の時期の国際決済銀行設立をめぐる構想について焦点が当てられた。

なお、日程調整の都合で最終年度の予算額からの繰り越しを行なうことにより2012年度に、A. ヴィンセントおよびD. パウチャーの参加を得てワークショップを開催した。ここでは、いわゆるイギリス理想主義における有機的ビジョンの特質を考慮することと並んで、世紀転換期の社会哲学・政治哲学が社会正義や幸福など現代に至る問題圏に対して提供しうるはずの視座をめぐって、検討を加えた。

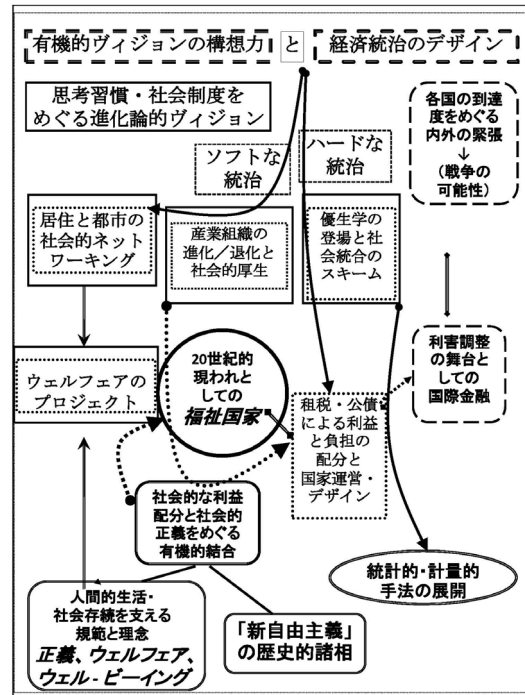
以上のような政治的、文化的レベルまで含めた検討は、経済統治と社会意識との連関のなかで有機的ビジョンの意義を位置づけるための豊かな土壌を掘り起こすものとなった。なお、研究組織メンバーは国内外の諸学会において関連テーマでの報告を随時行なった。

4. 研究成果

19世紀末以降の社会のあり方を組み立てるにあたって、ダーウィンやスペンサーに典型的な進化論的な思考は多様な影響を及ぼした。一般に「社会ダーウィニズム」といういささかミス・リーディングな呼称で知られることとなったこの傾向は、原子論的・個人主義的な社会把握とは異なって、3つの特徴において19世紀末から戦間期に至る社会構想に強く影響を及ぼした。第1に中間的な組織における役割の組み合わせを重要なものとみなしたこと、第2に進化・成長の可能性を重視するとともに、その対極における退化の可能性をも見据えたこと、そして第3に、統計的な手法を活用する優生学と結びついて人為的淘汰の発想の具体的な進展を生み出したことである。

進化論的な思考は、ドイツ思想やイギリスのいわゆる理想主義、フランス実証主義などに見られる有機体説的な社会観と融合しつつ、経済的な統治のデザインにとって重要な役割を果たした。まず、イギリスやドイツなどにおいては、階級間の利害調整や生活困窮者への給付をめぐる税負担の配分をいかに

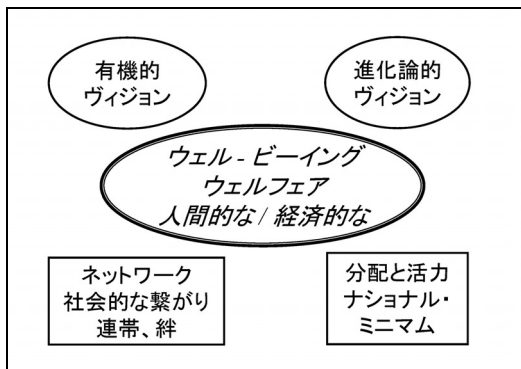
設定するののかという問題とともに、コミュニティをいかに維持するのかをめぐる理念とも深く結びつく問題領域を作り出した。また、世紀末以降のフランスや戦間期のイタリア、ドイツ、日本では、中間的な組織の目標を全体的な理念にいかに束ねるののかという意味での緊張を生み出した。



したがって、これらの問題圏は経済統治の現われかたという観点で見た場合、1番目の図に示すように、二つのパターンに分けておくことができる。つまり、制度、組織、生活習慣などが自ずと育つことに委ね、もしくはそれを補佐するという意味での「ソフトな統治」と、優生学のように強烈な社会的メッセージを伝え、あるいは一元的な基準のもとで整えられる税などの仕組みを活用するという意味での「ハードな統治」とである。前者が慣習などに委ね、あるいは自由を積極的ないし少なくとも肯定的に描く政治傾向と結びつくのに対して、後者は数量的に管理し、あるいは機構を整えるものであって、20世紀中葉のいわゆる「社会工学」に連なるものともなった。

このように社会構想と政策課題との両面において複層的に現われる有機的なビジョンは、理念的な意味での「よきあり方」をどのように見定めるののかという問題圏とも深く関わる。たしかに、とりわけ市場型に組まれる社会においては効率や達成度が重要な意味を持つのではあるが、人間の生存のあり方という観点においてみた場合に「ウェルフェア」の内実が問われるのである。19世

紀半ばまでは「富裕」、「ウェルス」などと大差のない意味で緩やかに用いられた「ウェルフェア」の用語は、19世紀後半以来いったんは、望ましさの意味での「ウェルビーイング」と結びつく言葉となった。そして20世紀になってから、「福祉国家」、「社会福祉」、「社会的厚生」、「厚生経済学」など多様な意味で活用されることとなる。本研究課題では「正義」、「自由」、「新自由主義」など同時期に大きくその含意を切り替えていった用語や思想傾向とも関連づけながら、「ウェルフェア」および「ウェルビーイング」概念の旋回の意義を探った。



これらの概念は2つ目の図に示すように、有機的ヴィジョンおよび進化論的ヴィジョンという互いに重なり合いながらも特質を異にする二つの言説のスタイルと密接な関連をもって展開した。そして、市場型を維持した社会においては(いわゆる社会主義を別として見た場合)大きくいって2通りの、実際にはしばしばオーバーラップして現われる傾向に連なった。つまり、人びとの社会的な繋がり(ネットワーク)のありようを「社会的絆 social bond」や「連帯」の標語のもとに重要視する思想傾向と、経済的な取り分や政治的な参加に着目して分配と活力とをいかに結びつけるのかに腐心し、「ナショナル・ミニマム」という具体的目標を設定する政策傾向とである。

以上のような検討の一端が、研究組織メンバーの研究成果として発表・公刊され、複数の論文集にも盛り込まれた。2つの図に示す包括的な検討の結果を盛り込むべき英文の研究論文集については、その編纂のためにいまなお時間を要しているのが弱点である。研究期間を終了したのちではあるが、共同研究のために招聘した海外研究者たちとも連絡を取りながら、目下その作業を継続している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計15件)

深貝保則、生存をめぐるエコノミー：近代の了解・再考に向けて(1) 横浜国際社会科学研究所、No.17-1、2012、1-12頁、無、<http://hdl.handle.net/10131/8169>

深貝保則、書評：竹内幸雄著『自由主義とイギリス帝国 - スミスの時代からイラク戦争まで -』(ミネルヴァ書房、2011年) 西洋史学、No.248、2012、68-70頁、有

高哲男、19世紀後半イギリスにおけるニュー・リベラリズムの台頭とダーウィンの道徳進化論 H.スペンサー、T.ハクスリー、D.G.リッチーを手がかりに、エコノミクス、No.16-4、2012、99-170頁、無

Tamotsu Nishizawa, Marshall on Progress and People's Welfare, History of Economic Thought and Policy, No.1-1, pp.21-38, 2012, 無

Tamotsu Nishizawa, Business Studies and Management Education in Pre-war Japan: A Comparative Perspective Entreprises et Histoire, No.65, 2011, pp.43-59, 無

中山智香子、『マネジメント』の人間主義的功罪、現代思想、vol.38-10、2010、160-171頁、有

中山智香子、非市場型社会の構想：K・ポラーノの二つの「戦後」、社会思想史研究、No.34、2010、37-51頁、無

Kazuhiko Yago, The Anatomy and Pathology of Empire: Three Balance Sheets of Russian and Soviet Banks, Slavic Research Center, Hokkaido University, 2010, pp.61-86, 無

栗田啓子、19世紀フランスの土木エンジニア - 公共の利益と経済計算 -、SHIGA建設、No.49、2010、5-14頁、無

Giovanni Pavanelli and Chikako Nakayama, Lifelong Friendship: The Correspondence between Oskar Morgenstern and Luigi Einaudi, Storia del Pensiero Economico, No.1, 2008, pp.95-120, 無

[学会発表](計12件)

深貝保則、オイコノミア、エコノミー、そして経済 - 概念と知の類型、社会思想史学会第37回大会(セッション・各国、各時代比較による近代社会思想史記述の試み) 2012年10月27日、一橋大学
矢後和彦、国際金融機関におけるケインジアンと反ケインジアン、ケインズ学会第一回大会、2011年12月3日、上智大学

Chikako Nakayama, 'Fade-out and

Resurgence of Subjectivity in Market Analysis,' The 2nd International Scientific Conference of the Ukrainian Association of International Economics, 'Post-Crisis Global Economy: Restoration of Equilibrium' July 5-6, 2011, キエフ(ウクライナ)

高哲男、19世紀後半イギリスにおけるニュー・リベラリズムの台頭とダーウィンの進化論 H.スペンサー、T.ハクスリー、D.C.リッチーを手掛かりに、経済学史学会西南部会 110 回例会、2010 年 12 月 11 日、九州大学

栗田啓子、ジッド=リストの経済学史 - 世紀転換期における経済学観の変容 - 、経済学史学会全国大会、2010 年 5 月 23 日、富山大学

Yasunori Fukagai, 'Richard T. Ely, Edwin R. A. Seligman and the German Influence to US and to Japan: Political Languages of Land and Taxation Crossed the Oceans, 1880s-1900s,' The Political Economy of Taxation in Japan and United States: A symposium on the occasion of the 60th anniversary of the 1949 Mission of Carl S. Shoup to Japan, December 12, 2009, Yokohama National University

Yasunori Fukagai, 'Liberal Scheme of Welfare and the Idea of Social Justice: From Mill to Hobhouse,' International Society for Utilitarian Studies Conference, September 11-13, 2008, University of California - Berkeley, USA

〔図書〕(計 10 件)

Elliot Brownlee, Eisaku Ide and Yasunori Fukagai (eds.), Cambridge University Press, *The Political Economy of Transnational Tax Reform: The Shoup Mission to Japan in Historical Context*, 2013 (forthcoming), 472p.

中山智香子・山下範久、作品社、翻訳：ジョヴァンニ・アリギ『北京のアダム・スミス：21 世紀の諸系譜』2011、673 頁
矢後和彦、日本経済評論社、伊藤正直・藤井史朗編著『グローバル化・金融危機・地域再生』「世界経済の編成原理はどう変わってきたか 国際金融機関の論争史」2011、7-81 頁

中山智香子、勁草書房、『経済戦争の理論』2010、243 頁

Roger Backhouse and Tamotsu Nishizawa (eds.), Cambridge University Press, *No Wealth But Life*,

Welfare Economics and the Welfare State in Britain, 1880-1945, 2010, 281p

深貝保則、日本経済評論社、小野塚知二編『自由と公共性 - 介入的自由主義とその思想的起点 - 』2010、253-284 頁(「ウエルフェア、社会的正義、および有機的ヴィジョン」を執筆)

矢後和彦、蒼天社出版、『国際決済銀行の 20 世紀』2010、349 頁

Yuichi Shionoya and Tamotsu Nishizawa (eds.), Edward Elgar, *Marshall and Schumpeter on Evolution: Economic Sociology of Capitalist Development*, 2008, 285p

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

深貝 保則 (FUKAGAI YASUNORI)

横浜国立大学・経済学部・教授

研究者番号：00165242

(2) 研究分担者

中山 智香子 (NAKAYAMA CHIKAKO)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：10274680

高 哲男 (TAKA TETSUO)

九州産業大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：90106790

栗田 啓子 (KURITA KEIKO)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：80170083

堂目 卓生 (DOME TAKUO)

大阪大学・経済学研究科・教授

研究者番号：70202207

矢後 和彦 (YAGO KAZUHIKO)

早稲田大学・商学大学院・教授

研究者番号：30242134

西沢 保 (NISHIZAWA TAMOTSU)

一橋大学・経済研究所・教授

研究者番号：10164550

井手 英策 (IDE EISAKU)

慶應義塾大学・経済学部・准教授

研究者番号：80337188